

科目選択を生かした進路指導について

—総合学科の特色を生かした進路指導—

農業科 高柳真人・工業科 大平典男

1. はじめに

普通科・専門学科に並ぶ第3の学科として、平成6年度よりわが国の高等学校に設置されるようになった総合学科は、「普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科」（文部省、1993a）である。選択履修を取り入れることは、総合学科の設置に限らず、最近の高等学校教育の一つの特徴的な傾向となってきたということができよう。例えば、この点について、文部省（1983a）は、「教育課程に類型を設けたり、生徒が自由に選択履修できる教科・科目を数多く設けるなどの配慮が進んでいる」と述べているほどである。

このことは、現行指導要領の総則「第5款 教育課程編成に当たって配慮すべき事項」の1に、「生徒の特性、進路等に応じて適切な教育を行うため、多様な各教科・科目を設け生徒が自由に選択履修することのできるよう配慮するものとする。また、教育課程の類型を設け、そのいずれかの類型を選択して履修させることも差し支えないが、この場合、その類型において履修させることになっている各教科・科目以外の各教科・科目を履修させたり、生徒が自由に選択履修することのできる各教科・科目をも設けたりするものとする」（文部省、1989）という記述に対応したものとえよう。この記述にみられるように、教育課程の編成に当たっても、学科や類型、科目等の選択履修の意義が強調されているのである。また、このような方向性は、今後も引き継がれていくことになる。すなわち、平成15年より施行される高等学校の新指導要領においても、「第6款 教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」の「1 選択履修の趣旨を生かした適切な教育課程編成」に、「教育課程の編成に当たっては、生徒の適性、進路等に応じた適切な各教科・科目の履修ができるようにし、このため、多様な各教科・科目を設け生徒が自由に選択履修することのできるよう配慮するものとする。また、教育課程の類型を設け、そのいずれかの類型を選択して履修させる場合においても、その類型において履修させることになっている各教科・科目以外の各教科・科目を履修させたり、生徒が自由に選択履修することのできる各教科・科目をも設けたりするものとする」（文部省告示、1999）という

記述がみられるからである。

このようにみえてくると、生徒の選択履修、科目選択の指導の重要性が実感されるであろう。ところで、どのような選択履修を行わせるか、換言すれば、科目選択に関する指導を進めるかということについては、「将来の進路の選択と不可分の関係にある」と考えられ、「この指導の充実が高等学校進路指導に課せられた当面の重要な課題と言える」（文部省、1983b）ものである。

特に、総合学科においては、「教育課程の編成に当たっては幅広く選択科目を開設し、生徒の個性を生かした主体的な選択や実践的・体験的な学習を重視し、多様な能力・適性等に対応した柔軟な教育を行うことができるようにすること」（文部省、1993b）を教育の特色の一つとしている。総合学科では、卒業するまでに履修する科目の半分以上が選択科目になっている。生徒の進路指導に深い関係を持った科目選択に関する指導が、とりわけ重要性を帯びてくるということができよう。

ところで、適切に科目を選択するためには、生徒一人一人の興味や関心、適性やそれぞれの進路の希望を踏まえることが必要である。このことは、従って、きわめて個別的、個性的な性格を有している。この辺の事情について高柳（1998a）が、「将来栄養士になりたいと考える生徒は、食物調理系の科目や受験に必要な科目を中心に選択することができるし、事務系の職業に就くことを考えている生徒であれば、簿記や情報処理の科目を中心に選択することができる。生徒は時間割を作る過程で、自分が希望する進路に必要な科目は何か、自分の興味、適性は何かということを実際に考えざるをえない。生徒にとっては困難な課題であるかもしれないが、自分の生き方を考え、自己決定を行うよい機会となっている」と述べているとおりである。

従って、その指導に当たっては、個に応じた指導が重要であり、「さまざまな情報提供や、一人一人の希望を確認しながらの相談やアドバイスが欠かせない」（高柳、1998b）のものであるといえよう。科目内容に関する情報提供などは、全体指導の場で実施されても構わないであろうし、その方が効率がよい場合も少なくないと思われる。しかし、各生徒が各自の科目選択（時間割作成）を

検討するに当たっては、個別指導が不可欠となってくる
といえよう。

このような実状を踏まえ、本稿では、先ず、生徒が適切な科目選択を行うことを援助するために本校で行われている科目選択に関する指導について概観する。次いで、平成10年度に本校生徒を対象に行った調査の結果をもとに、科目を選択することと生徒の進路検討行動（自己の将来の進路について考えることをこう呼ぶこととする）との関係を明らかにし、併せて、科目選択を生かした進路指導の進め方について検討するものである。

2. 本校における科目選択指導

(1) 「産業社会と人間」における指導

本校において、生徒が科目選択を行う機会として、先ず挙げられるのが、原則履修科目「産業社会と人間」における単元「本校における履修計画を作る」での学習である。この単元の学習に先立ち、生徒は、単元「自己を見つめる」及び、単元「職業を理解する」を学習している。前者では、自己理解への探索活動を行い、次いで、後者において、社会人講話、職場見学、職場体験学習等を通じて、職業の世界を探索し、勤労や職業の意味を学んでいる。それらの単元の学習を通じて、自己や職業世界への関心を持たせるようにしている。

「本校における履修計画を作る」という単元では、先ず、本校が設定した8つの系列（系列とは、生徒が所属するコースのことではなく、学習を進めていく上で、相互に関連性が強く、系統性を持った科目群のことである。本校では、生物資源・エコロジー・機械技術・メカトロ・調理・アパレル・国際流通・ビジネスの8系列を設定している）の基礎科目である「農業基礎」・「環境科学Ⅰ」・「工業基礎」・「調理Ⅰ」・「服飾デザイン」・「商業基礎」に関する体験実習を行う。全生徒が、全ての系列に関する学習を行うのである。この学習を通じて、生徒は、各系列学習についての概要を理解することになる。その後、各教科から各系列を構成する科目の内容説明を受けた後、生徒は、2年次、3年次で学習する科目を選択し、各自の時間割を作成することになる。系列科目をベースに、それぞれの興味、関心や進路の希望などを加味して、各自の履修計画（時間割作成）を行うわけである。生徒は、教科担任やHR担任と相談しながら、科目を選択していくが、また、夏期休業中に、保護者とも、その時間割について相談するよう指導している。本校副校長の服部（1998）が述べているように、「本校で

は『産業社会と人間』のメインは、履修計画にあると考えている。『履修計画を自分でつくる』というところに総合学科の本質があり、『ここをしっかりとやらなければ総合学科に入学した意味はない』と指導するのである。

(2) 履修計画の再検討

先に述べたように、本校では、1年次前期集中科目である「産業社会と人間」において、夏休み明けに履修計画を決定する。後期の同じ時間帯には、履修計画により各自が選択した「系列基礎実習科目」を履修することになっている。この科目の学習を通じて、生徒は各自の、系列にベースを置いた学習の基礎を学ぶことになるが、同時に、ここでの学習が、それぞれの生徒の適性を吟味する経験となっているといえることができる。また、2年次になり、各自が選択した科目の学習が行われるが、ここでも、「日々の学習に取り組むことは、そのまま自分の向き不向きや学習分野の背景となる職業や学問の世界を理解することにつながり」、「この過程で、自分のやりたかったことがいっそうはっきりしてくることが多い」（高柳、1998c）のものである。従って、学習を進めていくうちに、履修計画を見直したいという生徒が出てくることになる。その際、安易な理由による科目変更は認めるべきではないと思われるが、将来の進路設計や適性を伸ばしていこうとする者のための履修計画を修正する機会は、本校でも用意されている。その際には、二者面談や三者面談の機会をはじめとして、HR担任が相談に乗ることが多い。

3. 自己の進路を検討する機会としての科目選択

それでは、当の生徒は、科目選択をどのように捉えているのであろうか。進路検討行動との関係から、この点を明らかにしたい。この目的で、平成10年度に、本校の1～3年の全生徒を対象にした「総合学科の進路指導に関する調査」と題する調査が行われた。調査用紙は、7月に配布され、1クラスを除いて、夏期休業事前指導の日を実施された。1年生1クラスのみ、9月1日に実施された。実施当日に、調査用紙が回収された。

この調査のうち、「1. 科目選択（自分だけの時間割を作ることについて）」と題された調査項目の結果について分析を加えるものとする。調査用紙の前文及び、この調査項目を図1に示す。

以下に各調査項目の結果を示すとともに、その結果についての考察を行う。

(1) 科目選択を行う際考慮すること
「調査項目①時間割を決める際、考慮したことがらで当てはまるものの記号に丸をつけて下さい(複数回答可)。それ以外のものがあれば、「その他」に記入して下さい

い」という問いに対し、アからオの選択肢から選択する(その他自由に記述する)形式の質問を行った。
この質問に関する回答を図2に示す。「その他」に関する記述は殆どなかったため、ここには示さなかった。

総合学科の進路指導に関する調査

農業科・進路指導部 高柳 真人

この調査は、総合学科の特色を生かした進路指導の進め方を考えるための基礎資料を得るために行われます。結果は、統計的に処理され、個々の回答者に迷惑をかけることはありません。総合学科で学んだ経験をもとに、調査にご協力下さい。

1. 科目選択(自分だけの時間割を作ること)について

①時間割を決める際、考慮したことがらで当てはまるものの記号に丸をつけて下さい(複数回答可)。それ以外のことがあれば、「その他」に記入して下さい。

- ア. 自分の興味・関心 イ. 自分の適性 ウ. 希望する進路の実現に必要な
エ. 習得(合格)しやすさ オ. 友人が履修すること
カ. その他()

②自分の時間割を作るため、どの科目を選択するかを考えることは、将来の進路を考えることにつながっていますか。

- ア. たいへんつながっている イ. ややつながっている ウ. どちらともいえない
ウ. あまりつながりがない オ. 全然つながりがない

③時間割を作る際、役に立った情報源は何ですか。当てはまる記号に丸をつけて下さい(複数回答可)。それ以外のものがあれば、「その他」に記入して下さい。

- ア. HR担任のアドバイス イ. 教科担任のアドバイス ウ. 友人のアドバイス
エ. 保護者からのアドバイス オ. 進路指導部からの情報 カ. 雑誌等の情報
キ. 「産業社会と人間」の授業 ク. 自分のこれまでの知識、経験
ケ. その他()

④時間割を変更しましたか。した人は、主としてどのような理由からでしょうか

- ア. した イ. しない

- ア. 自分の興味・関心 イ. 自分の適性 ウ. 希望する進路の実現に必要な
エ. 習得(合格)しやすさ オ. 友人が履修すること
カ. その他()

⑤時間割を決める際、必要な情報として当てはまるものの記号に丸をつけて下さい。また、それが「産社」で得られたら「産」、 「産社」以外の授業なら「他」、三者面談で得られたら「三」、得られなかったら×を()の中から選んで丸をつけて下さい。

- ア. 成績や適性など、自分に関する情報(産・三・他・×)
イ. 大学・専門学校・企業等進路先に関する情報(産・三・他・×)
ウ. 希望する進路にふさわしい科目選択の仕方に関する情報(産・三・他・×)
エ. 科目の内容に関する情報(産・三・他・×)
オ. その他() (産・三・他・×)

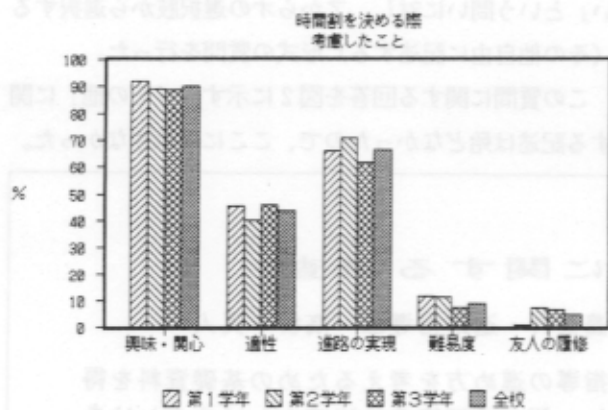


図2 科目選択をする際考慮したこと

結果については、各学年ごと及び全校について分析を行ったが、学年ごとの結果と全校の結果については、同様の傾向がみられた。すなわち、科目選択を行う際に考慮したこととして、最も多かったのは、どの学年でもおよそ9割の生徒が挙げた「自分の興味・関心」を考慮するということである。次いで、6割以上の生徒が考慮している事項として、「希望する進路の実現に必要」ということであった。また、半数近くの生徒は、「自分の適性」についても考慮していることがわかった。

それに対して、「習得（合格）しやすさ」や「友人が履修すること」を挙げた生徒は、ともに1割以下であり、自分の興味・関心や適性を生かしたり、将来の進路に向けて必要な科目を学習していこうとする主体的、積極的な姿勢で、科目選択に臨んでいる生徒がほとんどであることが窺える結果となっている。また、自己の興味・関心や適性を吟味する延長線上に、生徒の進路先が考えられるとすれば、6割以上の生徒が挙げている「希望する進路の実現に必要」という回答とともに、科目選択という機会をうまく生かしていくことが進路指導に大きな役割を果たすことを示すものであるといえよう。

また、「自分の興味・関心」を考慮する生徒がこれだけいるということは、本校の教育課程が、総合学科のもう一つの教育の特色である「生徒の個性を生かした主体的な学習を通して、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にすること」（文部省、1993c）という課題に応えたものであることを示しているといえることができる。

(2) 科目選択と進路検討行動との関連

「調査項目②自分の時間割を作るため、どの科目を選択するかを考えることは、将来の進路を考えることにつな

がっていますか」という問いに対し、アからオの選択肢から一つ選んで回答する形式の質問を行った。

その結果を、図3に示す。

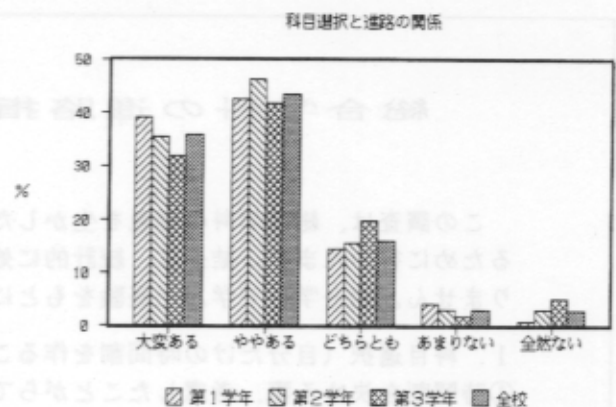


図3 科目選択と進路検討行動との関連

この調査は、生徒が科目選択をすることが、自分の将来の進路を考えることと関わりがあるかどうかということについて直接的に確かめたものである。ここでも、各学年ごとの結果と学校全体の結果は同様の結果を示している。すなわち、「ややつながっている」と答えた生徒が最も多く4～5割、次いで「たいへんつながっている」と答えた生徒が3～4割となっている。両者を併せると、どの学年でも7～8割の生徒が、科目選択を通じて将来の進路について考えていることがわかる。各学年とも、「どちらともいえない」と回答した生徒は2割以下であり、「あまりつながりがない」と「全然つながりがない」と回答した生徒は、併せても1割以下であった。調査2でも示唆されたように、この結果からも、科目選択を行うことが進路検討行動のきっかけとなっていることを示していると考えられる。

(3) 科目選択に役立つ情報

それでは実際に、科目選択を行う際、生徒はどのような情報源を利用しているのだろうか。生徒が科目選択を適切に行うことの援助を検討することに役立つと思われるこの点を明らかにするため、以下の調査を行った。

「調査項目③時間割を作る際、役に立った情報源は何ですか。当てはまる記号に丸をつけて下さい（複数回答可）。それ以外のものがあれば、「その他」に記入して下さい」という問いに対し、アからクの選択肢から選択する（その他自由に記述する）形式の質問を行った。

この質問に関する回答を図4に示す。「その他」に関する記述の中では、「先輩のアドバイス」や「ガイダン

スブック」と回答した者が多かった。

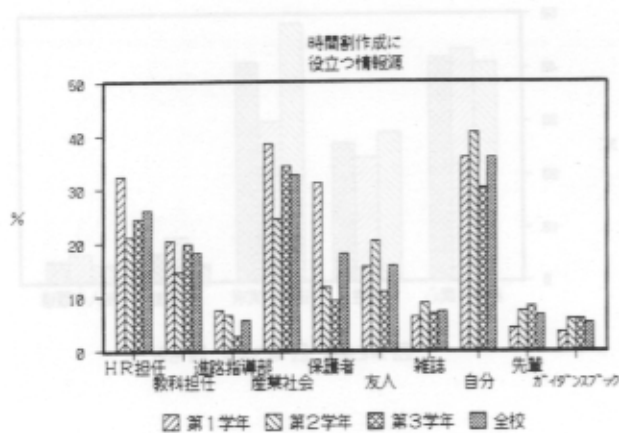


図4 科目選択に役立つ情報

各学年ごとの結果と学校全体の結果には、多少の異同がみられるが、概ね、同様の結果を示しているということができよう。生徒が時間割を作成する際に役に立った情報源として、全体的に最も多かったのは、「自分のこれまでの知識、経験」という回答で、学年別にみても、3～4割程度の回答がみられた。特に、2年生では最も回答の多い項目となっている。「自分のこれまでの知識、経験」の内容として考えられることは、調査①の結果などからみて、自分の興味・関心、希望する進路などとの関係が深いように思われる。すなわち、生徒は自分の興味・関心や、将来進みたい進路についての知識を持っていたり、そうした知識を得るための経験を有しているということがあるのではないかと考えられる。こうした知識や経験が高校入学以前に得られたものか、入学後に得られたものであるかは明らかではないが、本校への進学者像として、入学時に既に、本校が設置している系列学習（専門教育）に期待して入学する生徒も少なくない現状から考えると、高校入学以前から、ある程度、自己理解が進んでおり、それに基づく知識や経験を生かして科目選択を考える生徒も相当数存在することが考えられる。また、この調査を行った時点では、1年生も、「産業社会と人間」での「自己を見つめる」及び「職業を理解する」、「本校における履修計画を作る」といった各単元での学習を終えており、そこで得られた知識や経験も生かされている可能性は十分に考えられるところである。いずれにせよ、相当数の生徒が、自分の進路につながる科目選択について、人任せでなく、自分のそれまでの学習の成果を生かしているとみられる結果が得られたといつてよいと思われる。

全体の回答が次に多いのは、「『産業社会と人間』の授業」という回答で、1位の「自分のこれまでの知識、

経験」とほぼ同数といつてもよいような、全体で3割以上の生徒の回答が得られている。2年生で、25%程度と他の学年に比べやや回答数が少ないが、1年生では、4割近くの生徒が選択し、最も回答が多い項目となっている。「産業社会と人間」が役立つと回答する生徒が多いのは、単元「本校における履修計画を作る」における学習の効果の表れと考えることができよう。特に、その学習中である1年生にとっては、印象が強いのであろうと思われる。総合学科への導入科目といわれる「産業社会と人間」は、生徒の科目選択、ひいては、総合学科における個性に応じた学習に生徒を導く役割を果たしているということができると考えられる。

次いで回答が多いのが、全体で25%を超える生徒が選択している「HR担任のアドバイス」である。本校では、二者面談、三者面談等の定期的な相談をはじめとして、HR活動や「産業社会と人間」科目担当者としてなど、HR担任と生徒が接する機会が少なからず設けられている。1年生の回答が3割を超え、最も多くなっているが、1年次の三者面談の主たる相談内容が科目選択をテーマにしていることも含め、こうした生徒とHR担任がふれあう機会が多いことが、このような高い回答率につながっていると思われる。

以下、「教科担任のアドバイス」、「保護者からのアドバイス」、「友人のアドバイス」を選択した回答も、それぞれ2割近くあり、これら、生徒の周辺にいる人的資源も時間割作成に役立つ情報源と考えられる。

高柳ら(1998)は、筑波大学附属坂戸高校での生徒を対象とした調査を行った結果、「授業の中で、将来の進路につながる可能性のある世界にふれることのできた生徒が一定数いる」ことを報告している。この例に示されるように、教科担任による授業時における進路情報の提供が行われているが、その他にも、「産業社会と人間」での系列体験学習などでの教科担任とのふれあい、或いは、日常のちょっとした機会などでのやりとりなどを通じて、教科担任が生徒の科目選択にそれなりの力になっていることが示されているということができよう。

科目選択に当たり、保護者の果たす役割も少なくないといえるが、特に1年生では、保護者と回答した生徒が3割以上おり、HR担任と同じくらい多くなっている。この理由として、この調査に先立って6月に行われた三者面談の影響も少なくないと思われるが、少なからぬ生徒が、科目選択を通じて保護者とよく話し合いを行っているようである。また、2、3年生も、1年生ほど多くはないが、1割程度の生徒は、保護者から科目選択に当

たってアドバイスをもらっていることがわかる。

科目選択は、自分の生き方と密接な関わりがあるとはいえ、友人と相談するの生徒も少なくないと思われる。そのような中で、「友人のアドバイス」が役立つこともあるのであろう。

科目選択に役立つ情報として最も多い回答は、「自分の知識、経験」であった。しかし、その一方で、HR担任、教科担任、保護者、友人、先輩からののアドバイスが役に立ったという回答を合わせると、延べ数ではあるが9割くらいの選択があった。このことから、科目選択に当たっては、自分の知識や経験を重視しつつも、一人決めすることなく、周囲のアドバイスを生かした選択がなされているように考えられる。「進路指導部からの情報」、「雑誌等の情報」、「ガイダンスブック」などといった進路を考える上での諸情報が役に立ったという回答は、全体の中では選択率が低い。単なる情報ではなく、アドバイスなどといった形で、人間関係に基づく情報提供の方が、生徒にとっては役に立つ情報源となっているということができるとは思われる。

(5) 時間割の変更

先に述べたように、将来の進路設計や適性を伸ばしていくこうとする者のため、履修計画を修正する機会が本校では用意されているが、実際に、時間割を変更した生徒がどれくらいいるのか、また、その理由は何かということについて調査した。

「調査項目④時間割を変更しましたか。した人は、主としてどのような理由からでしょうか」という問いに対し、先ず「ア. した イ. しない」に答えた後、アを選択した者が、更に、アからオの選択肢から選択（「その他」の事項があれば自由に記述）する形式の質問を行った。

この質問に関する回答を図5、6に示す。「その他」に関する記述については、殆どなかったのでここには示さなかった。

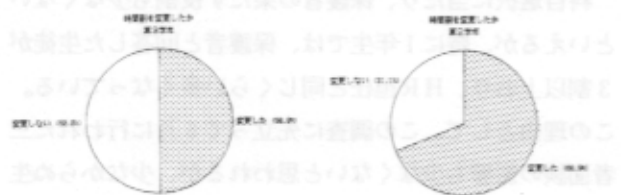


図5 時間割を変更した生徒の割合

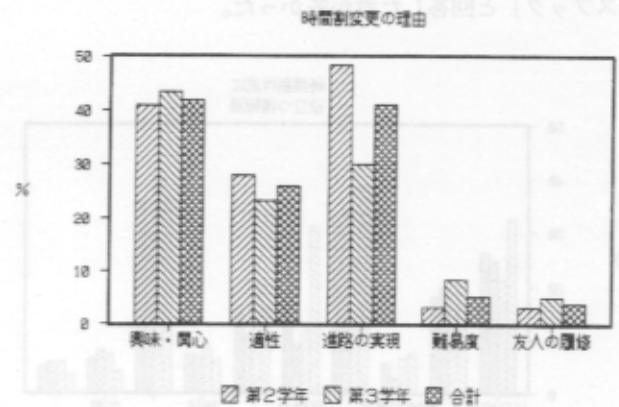


図6 時間割を変更した理由

時間割を変更した経験があるのは、2、3年生に限られるので、調査は、2、3年生を対象に行われた。その結果、図5に示したように、3年生の50.0%、2年生の68.9%が時間割を変更していた。両学年とも、半数以上の生徒が時間割を変更しており、特に、2年生については、7割近くという多くの生徒が時間割を変更していた。

時間割を変更した理由としては、「自分の興味・関心」と「希望する進路の実現に必要」という項目を選択した生徒が多く、ともに4割程度の選択率であった。

「自分の興味・関心」は、2、3年生とも同じような選択率であったが、「希望する進路の実現に必要」とであると答えたのは2年生の場合、5割近くにのぼっている。3年生も、この項目に対し、3割程度の選択率があった。その次の理由は「自分の適性」を回答した生徒で、2、3年生とも2割以上、全体で25%以上の選択率であった。トータルでは100%を越えているが、「複数回答可」という注釈を示さなかったため、この問いに対して、中には複数の回答を寄せた者もあったが、その多くは、回答が一つである場合が多く、調査①「時間割を決める際考慮したこと」に比べ、選択率が低くなっているが、「自分の興味・関心」や「希望する進路の実現に必要」という2つの項目が高い選択率となっているのは、同様の傾向を示したものであるといえよう。一方、調査①の結果と同様に、「習得（合格）しやすさ」や「友人が履修すること」を選択した生徒は、それぞれ1割以下であった。時間割を変更する生徒の中には、確かに、習得しやすさや、友人が選択しているからという理由の生徒はいないわけではない。しかし、そうした生徒は少数派であり、ほとんどの生徒は、自分の将来の進路について考えたり、将来の進路につながる可能性のある、自己の興味・関心や適性を踏まえて、時間割を変更していることが示され

た。

(6) 科目を選択する際に必要な情報と情報源

科目選択をする生徒の援助策を考えるための知見を得るため、科目を選択する際に、生徒はどのような情報を必要としているのかについて調査を行った。

「調査項目⑤時間割を決める際、必要な情報として当てはまるものの記号に丸をつけて下さい。また、それが『産社＝『産業社会と人間』』で得られたら『産』、『産社』以外の授業なら『他』、三者面談で得られたら『三』、得られなかったら×を()の中から選んで丸をつけて下さい」という問いに対し、アからエの選択肢から選択(「その他」の事項があれば自由に記述)する形式の質問を行った。

この質問に関する回答を図7～11に示す。「その他」に関する記述は殆どみられなかったのでここには示さなかった。

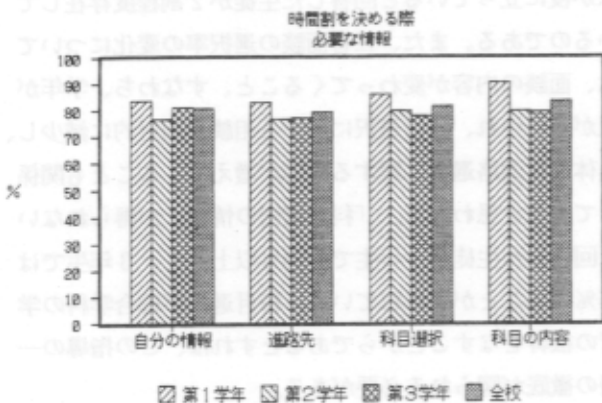


図7 科目選択をする際必要な情報

時間割を決める際、生徒が必要とする情報としては、「成績や適性など自分に関する情報」、「大学・専門学校・企業等進路先に関する情報」、「希望する進路にふさわしい科目選択の仕方に関する情報」、「科目の内容に関する情報」という選択肢に挙げられた4つの項目全てが要望されているという結果が得られた。すなわち、いずれの項目とも8割程度の高い選択率を示していた。4項目間で選択率に大きな差はなく、また、学年間でも顕著な差はみられなかった。1年生で「科目の内容に関する情報」を必要とする割合がやや高いが、科目選択を行う時期であることや、選択科目の学習を経験していないことなどがその背景にあると考えられる。

いずれにせよ、生徒は、自己に関する情報、進路先に関する情報、総合学科における学習に関する情報のいづ

れをも必要としており、これらの情報を生かしながらか科目選択を行おうとしているのではないかと考えられる。

次に、これらの情報をどこから入手しているかという、情報源について調査した。

① 自分に関する情報源

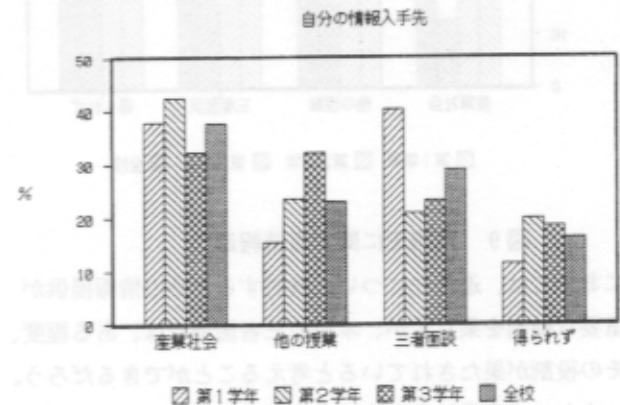


図8 自分に関する情報源

自己理解に関わる「自分に関する情報」は、図8に示したように、「産業社会と人間」から得ている場合が最も多く、全体で4割程度の選択率であった。各学年で約3割から4割と、学年ごとによる差はそう大きくないといえよう。次いで、三者面談から3割程度、「産業社会と人間」以外の授業から2割程度の情報を得ているという結果が得られた。三者面談では、1年生の選択率が高くなっている。逆に、「産業社会と人間」以外の授業の選択率は学年が上がるごとに高くなり、3年生が3割程度で最も高くなっている。1年次の三者面談は、科目選択に関わる「産業社会と人間」の学習を踏まえたものであり、自ずと、生徒自身についての話題が出ることも多くなることが、この高い選択率の原因となっていると考えられる。また、学年が上がるにつれ、様々な経験を積んでいく生徒にとっては、「産業社会と人間」以外の授業を履修することからも自己を理解したりすることが多くなってくると思われる。一方、「自分に関する情報」を得られないと回答している生徒も1年生で1割程度、2、3年生では2割弱存在している結果が示されている。

② 進路先に関する情報源

「進路先の情報」については、「産業社会と人間」以外の授業から得ていると回答した生徒が最も多く、4割程度存在する。1年生の3割強から、3年生の4割強まで、学年が上がるごとにわずかずつだが選択率は上がっている。次いで、三者面談から「進路先の情報」を得たと回答した生徒が2割強いることが示された。進路相談

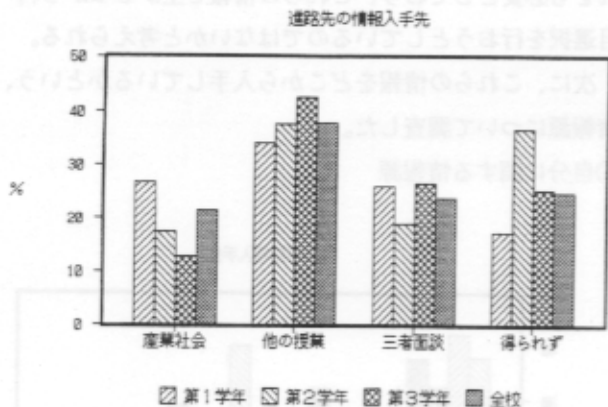


図9 進路先に関する情報源

においては、進路先について検討するための情報提供が重要な役割を果たすが、本校の三者面談では、ある程度、その役割が果たされていると考えることができるだろう。

また、「産業社会と人間」の授業からも、2割程度の選択率で、進路情報を得たという回答がなされている。単元「職業を理解する」においては、就職や進学について考える機会も用意されているものの、1年次に入学したばかりのこの時点では、進学先をひとつに絞り込むような指導ではなく、生徒それぞれの可能性を開かせる指導を重視しているため、他の授業に比べると、具体的な進路先についての情報入手源としては、選択率が低いのかもしれない。「進路先の情報」を入手できないと回答している生徒は、「自分に関する情報」を得られないと回答した生徒よりも多く、25%程度存在することが示されている。

③科目選択の仕方に関する情報源

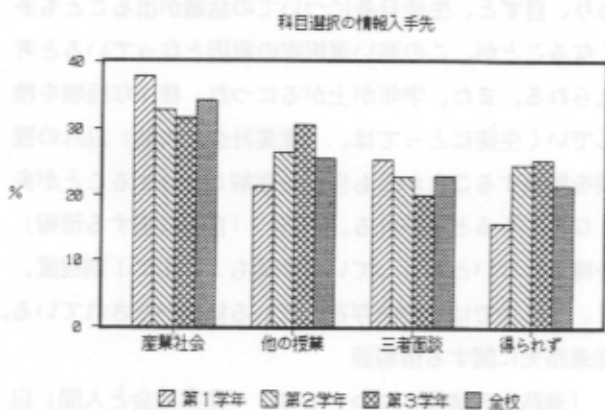


図10 科目選択の仕方に関する情報源

「科目選択の仕方」は、理念的な指導というよりも、実際的な指導項目に相当すると考えられるが、生徒にとっては、具体的に科目選択を進めていく上で必要な情

報になっていると考えられる。

この情報については、「産業社会と人間」の授業で得られたと回答する生徒がどの学年でも最も多く、学年平均で3割以上存在している。これは、単元「本校における履修計画を作る」での指導の成果と考えることができよう。また、それ以外の授業でも情報提供が行われたり、三者面談でも、情報が提供されていることを示す結果が得られている。すなわち、それぞれの選択項目に対して、2割以上の選択率が得られている。

「他の授業から」と回答した生徒は、学年が上がるごとにわずかながらでも選択率が上昇しており、一方、「三者面談」からと回答する生徒は、学年が上がるごとに、わずかながらでも選択率が下がっている。この原因としては、学年が上がるにつれ、様々な選択授業にふれる機会が増え、そこで科目選択に対する教科担当者からのアドバイスがあるからであろう。先に示したとおり、時間割作成に役立つ情報源として、教科担当者からのアドバイスが役に立っていると回答した生徒が2割程度存在しているのである。また、三者面談の選択率の変化については、面談の内容が変わってくることで、すなわち、学年が上がるにつれ、科目選択に関する相談が相対的に減少し、具体的な進路選択に関する内容が増えてくることも関係してくると思われる。「科目選択の情報」が得られないと回答した生徒が1年生でも15%以上、2、3年生では25%いることが示されている。科目選択が総合学科の学習の根幹をなすことからであるとすれば、この指導の一層の徹底が図られる必要がある。

④科目内容に関する情報源

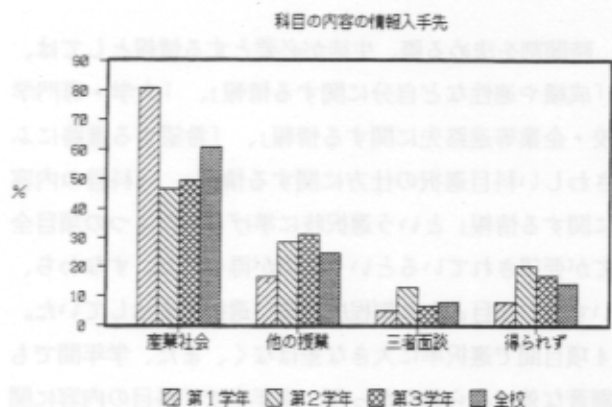


図11 科目内容に関する情報源

「科目内容」に関する情報は、どの学年の生徒も「産業社会と人間」の授業から得たという回答がいちばん多く、特に、1年生では、8割の選択率となっている。三

者面談からと回答した生徒の割合が1割程度と低いが、各科目の内容の全てをHR担任が把握するのは、120以上の選択科目がある中では容易でないということができ、組織的な対応、すなわち、「産業社会と人間」における系列科目のガイダンスや系列体験実習等の機会を通じて、系列担当者から実施するのが効果的かつ合理的であろう。「産業社会と人間」以外の授業から情報を得たという回答をした生徒も25%程度いる。系列に関する科目内容の紹介は、「産業社会と人間」でのガイダンスと併せ、選択科目の中でも意識的に行われることが望まれるであろうし、ある程度は行われているということができよう。「科目の内容」についての情報を得られないと回答した生徒が、学年平均で2割弱存在することが示された。

4. おわりに

本校が総合学科を開設して、早いもので6年が経過した。この間、我々は、総合学科というシステムを生かした学習指導、生徒指導、進路指導の進め方を模索してきた。本研究も、総合学科の特徴である、科目選択に焦点を定め、その特徴を生かした進路指導の進め方を検討していくために行われたものである。今回行った調査を通じて、科目選択と生徒の進路検討行動との関連性が明らかにされたと思われるし、その際、生徒がどこからどのような情報を得ているのかといったこともわかってきた。これからも、総合学科の特色を生かした教育方法について、様々な角度から検討を加えていきたいと考えてる。

総合学科のシステムを生かしていくことで、生徒は、自分の生き方なり方を考える機会を獲得する可能性が高いのではないかという実感を持っている。しかし、その一方で、自己指導能力が十分でない生徒にとっては、厳しい学科であるという感じも持っている。先にも示したように、科目選択を行う際必要な情報を得られなかったという生徒が2割程度存在していた。この結果を、8割位の生徒は、必要な情報を手に入れ、自分の興味や関心、将来の進路を踏まえた科目選択をして、学校生活を過ごしているのであるから、概ねよいということもできなくはないとも思うのだが、やはり2割の生徒にもこだわりたいと思っている。総合学科に限らず、自己指導能力の養成が、今後の教育の大きな課題となっていると思われる。総合学科では、科目選択を始め、重要な自己決定をするための機会が用意されてる。総合学科の特色を生かした、生徒の自己指導能力育成に関わる方策を今後も検討していきたいと考えている。

尚、本研究の一部は、平成10年度第40回高等学校教育研究大会（「総合学科における進路指導の進め方」）、及び、平成10年度本校の第4回総合学科研究大会（「本校進路指導の現状と問題点」）で発表が行われた。

引用文献

- 服部次郎 1998 「主体性を培う履修計画の作成」
『月刊高校教育』 学事出版 12月増刊号 p.41
- 文部省 1983 中学校・高等学校進路指導の手引き—高等学校ホームルーム担任編—（改訂版）日本進路指導協会 a : p.105, b : p.105
- 文部省 1989 「高等学校学習指導要領第1章総則」
『高等学校学習指導要領解説 農業編』付録2 実教出版 p.257
- 文部省 1993 『「産業社会と人間」指導資料』 ぎょうせい a : p.5, b : p.6, c : p.6
- 文部省告示 1999 『高等学校学：指導要領』 大蔵省印刷局 p.10
- 高柳真人 1998 「総合学科の進路指導」 国分康孝（編集代表）・中野良顕・加勇田修士・吉田隆江編『育てるカウンセリングが学級を変える [高等学校編]』 図書文化 a : p.100, b : p.100, c : p.101
- 高柳真人・大平典男 1998 「総合学科の特色ある科目学習を生かした進路指導—筑波大学附属坂戸高校の事例から—」 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第36集 p.73